

化石館だより



コラム

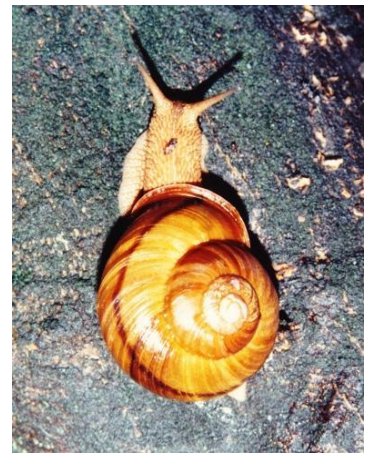
蝸牛（カタツムリ）から思うこと

6月は梅雨の季節です。雨の日が多く、じめじめしてうっとうしくなりますが、カタツムリたちは元気よく活動するようになります。カタツムリは陸上で棲息する巻貝の総称で、学問的には陸産貝類（陸貝）といいます。陸貝はカタツムリの他にもマイマイ、またデデンムシなどと呼ばれ子供たちにも広く親しまれています。いろいろな呼び名をもつということはそれだけ身近な生き物であったということです。



コガネマイマイ

陸貝の名前については柳田國男の「蝸牛考」がよく知られています。柳田はこの書物の中でカタツムリの呼び名が都から地方に向かって広がっていったことを紹介し、近畿地方では最も新しい「デデンムシ」が、中部・中国地方には次に新しい「マイマイ」が、関東・四国では中間の「カタツムリ」がつかわれ、東北・九州には古い「ツブリ」が、さらに東北北部や九州西部には最も古い「ナメクジ」という呼び名がつかわれていると言っています。しかし、現在では人の交流が多くなりテレビやラジオなどで標準語が広く行き渡っていますから、地方における言葉の違いは無くなってしまおうのでしょうか。なんとなく寂しい気がします。



ミノマイマイ

カタツムリを漢字で書くと「蝸牛」となります。「蝸」は渦巻のことですが、カタツムリの殻を裏返してみるとこの渦巻が良く見えます。殻の中央には「臍孔（さいこう）」という穴があります。この穴の有無、大小、深い・浅いなどの違いは種を判別する重要な手掛かりになっています。「牛」は頭部にある触覚を牛の角に見立てたのだと思われます。通常カタツムリと呼んでいる種類には触角の先に目が付いていますが、陸貝には触角の根元に目をもつ種類もいます。

さて「蝸牛」というと梁塵秘抄にあるこの歌を思い出します。

舞へ舞へ蝸牛。

舞はぬものならば、馬の子や牛の子に蹴(く)ゑさせてん、踏み破(や)らせてん。

まことに美しく舞うたらば、華の園まで遊ばせん。

この歌はどのようにして生まれたのでしょうか。歌の意味は遊女の身の上と絡めた深い解釈があるようですが、私が気になるのはカタツムリに「舞へ」と呼びかけていることです。「カタツムリの舞い」とはどのような情景をイメージしたら良いのでしょうか。カタツムリは触角を振り回しながら移動しますのでこの触角の動きを「舞い」と見たのでしょうか。でも通常見かけるカタツムリの触角はそれほど目立った動きはしていません。「舞い」をイメージするにはもう少し大きな動きが必要だと思うのです。ところが、触角がとても長く時には体も大きくのびして揺り動かすカタツムリがいるのです。金生山の周辺には比較的多く見られる種



カドバリニッポンマイマイ

類でカドバリニッポンマイマイというカタツムリがそれです。このカタツムリはとても長く体を伸ばすことができるのです。それに触角も普通見かけるカタツムリよりもずっと長いのです。小枝に這わせてやると先端部で長い触角を大きく振り回します。そのうち体も大きく伸ばしてゆらゆらと揺り動かします。「舞へ舞へ蝸牛」の歌は、このカタツムリと遊んだことから生まれたのではないかと思います。歌の作者は誰なのか分かっていませんが、今様の名手であった乙前（おとまえ）であったなら美濃国青墓宿（岐阜県大垣市青墓）の出身ですから、幼い時にカドバリニッポンマイマイで遊んだことがあったでしょう。青墓宿は金生山の西 1 km の場所ですから、カドバリニッポンマイマイを捕らえることは容易だったと思います。



今様では「蝸牛」をどのように発音したのでしょうか。「カタツムリ」ならば「舞へ舞へ蝸牛」から「マイマイ」の名が生まれてきた可能性があります。現在の童謡では「デンデンムシ カタツムリ」と歌われています。「カタツムリ」から「マイマイ」そして「デンデンムシ」の順になり、柳田が「蝸牛考」で示したことと符合します。妄想は次々広がっていきます。

（文責：高木洋一）

お知らせ

微化石観察コーナーを準備中

金生山の泥質石灰岩から、単体のフズリナ、貝形虫、巻貝、二枚貝、ウミユリの茎板、ウニの棘など、多種多様な微化石を取り出して観察できる体験コーナーを準備しています。微化石の一部は持ち帰ることもできます。お楽しみに。

問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)
Email kasekikan@city.ogaki.lg.jp